

自己管理不能な透析症例に，透析スタッフによる 透析終了時のみのリラグルチド管理で対応した 2型糖尿病の1例

西条中央病院 糖尿病内科

藤 原 正 純

要 旨

インスリン自己管理が困難であった認知症合併2型糖尿病の透析症例に対し，透析終了時の透析スタッフによるリラグルチド皮下注射のみで血糖管理を行うことで，糖尿病治療を患者本人の管理から全面的に解放し，順調に経過した症例を経験した。

はじめに

糖尿病で末期腎不全に陥り，透析に至る患者は少なくない。また，高度高齢化社会の現在，認知機能の低下等の問題からインスリン自己注射が望めない症例も多々経験する。

今回，インスリンによる自己管理が困難であった2型糖尿病に対し，透析終了時の透析スタッフによるリラグルチド皮下注射管理のみで血糖コントロールを図り，糖尿病治療を患者本人の管理から全面的に解放し得，順調に経過した症例を経験したので報告する。

症 例

症例：70歳男性（2型糖尿病，157 cm，61.6 kg）

家族歴：糖尿病（＋）

既往歴：狭心症

糖尿病性細小血管症：（＋）

網膜症：両側増殖性網膜症

神経症：四肢末端知覚低下

認知症：（＋）

経 過

物忘れ多く日常生活にも支障があった。インスリンは打ったことも忘れ，再度打つことも多い。本人が理解しやすい方法を考慮し，インスリン リスプロ 12 u/d（4-4-4）で加療していたが，認知機能低下のため，透析終了時，透析スタッフによるリラグルチド3回/週投与のみに変更し，患者はインスリン自己管理から解放された。リラグルチドの投与を透析終了時としたのは，透析液，透析膜への影響を除外するためと，また，透析スタッフによる管理上も好都合であったためである。

リラグルチド切り替え以降の経過を図1に示す。当時，院内でグルコアルブミンを測定できなかったことからHbA1cの推移を示すが，切り替え前8.3%であったHbA1c値（NGSP）は良好に低下しており，現在5.8%となっている。

考 察

リラグルチドは，GLP-1の臨床応用化で問題となっていた血中半減期の短さに対し，ヒトGLP-1に脂肪酸を付与することにより，1日1回投与を実現させた製剤である。本剤の特長を踏まえると，腎

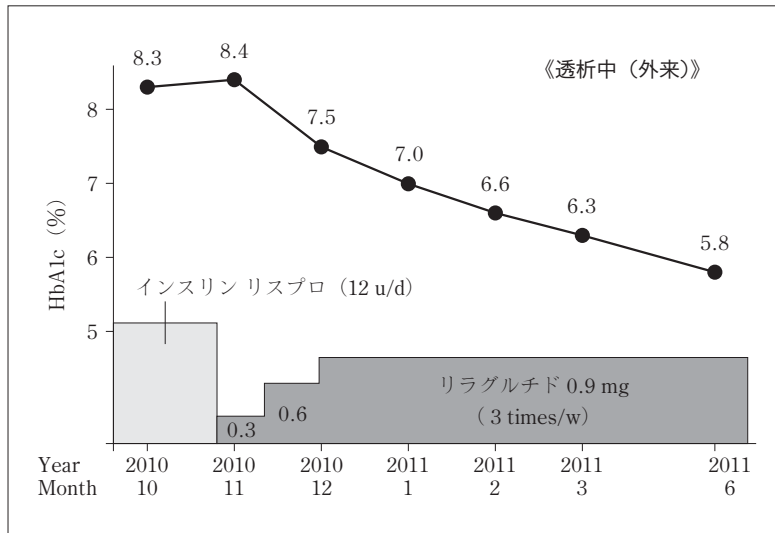


図1 経過表

機能障害を有する2型糖尿病患者にも十分に使用可能であると考えられる¹⁾。

認知機能低下のために自己管理が困難な2型糖尿病患者は多く経験するが、透析患者であれば安定して週3回受診することから、今回、血糖コントロールを本人管理によるインスリン治療から、透析終了時、透析スタッフ管理の元でのリラグルチド加療へ切り替えた。頻繁な受診・医療者による血糖管理が期待し得、糖の急な上昇にも対応できることから、それを前提とした処方が可能であった。

経過図に示すように、予定通りリラグルチドの皮下注射ができ、アドヒアランスの心配もなく、また、リラグルチドの薬理上、低血糖も認められなかった。経過中、食欲低下などにも十分注意を払いついてきたが、半年後には患者は自分が糖尿病加療をしていることすら忘却していた。

なお、直近のグルコアルブミンデータにおいても順調な経過である(表1)。

今後、本例のような認知症合併糖尿病患者が急激に増加することは大いに予想される。十分な配慮は必要であるが、透析症例のように頻繁な受診が前提となる2型糖尿病症例であれば、血糖コントロールから患者を解放できる透析スタッフのみが行うリラグルチドの投与は、現実的な方法として選択肢の一つとなると考えている。

当院では、本症例のように透析時のリラグルチド

表1 直近のグルコアルブミンデータ

日 時		GA (%)
2013年	10月	21.1
	11月	20.9
	12月	18.4
2014年	1月	18.5
	2月	18.8
	3月	18.6
	4月	17.9
	5月	17.9

投与例を3例経験しているが、いずれも順調な経過をたどっている。また、透析症例ではない場合でも、家族管理、訪問看護師管理など本人以外の管理によりリラグルチドのみで対応している症例も既に複数経験している。食事制限もままならない症例も多いが、低血糖が回避できる等多くの利点もあることから、認知症合併糖尿病患者に対する現実的な加療の一手段として提案したく、報告した。

著者のCOI (conflicts of interest) 開示: 特になし

参 考 文 献

1) Jacobsen LV, Hindsberger C, Robson R, et al: Effect of renal impairment on the pharmacokinetics of the GLP-1 analogue liraglutide. Br J Clin Pharmacol 2009; 68: 898-905.